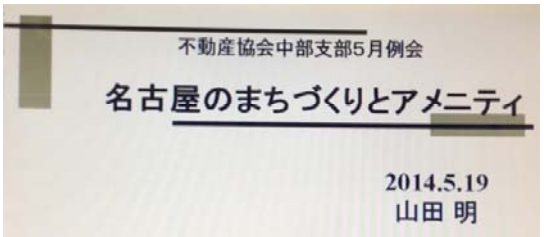
## 久しぶりの「講演」

１月中旬に突然「依頼」があり、写真のような講演を引き受けた。ウェブサイトから私を探し当てたとのことである。あらためてサイトの力を再確認した。初めての依頼先であり、最初は戸惑ったが、せっかくの機会なので時間をかけて準備した。

「報告要旨」の一部を下記に紹介しておきたい。




**◇「話」の概要とポイント**

今日の演題は「名古屋のまちづくりとアメニティ」としました。じつは私の最終講義のテーマは「地域から現代社会を考える」でした。足もとの地域、とりわけ名古屋から現代社会が抱える諸問題にアプローチするというものです。

今日は不動産協会というプロの皆さんですので、アメニティや都市魅力に焦点を当て、大都市名古屋を点検していきます。まず、まちづくりやアメニティの諸説を概観して、名古屋の評価を紹介しながら、まちづくりを過去から現在へと振り返ります。名古屋の現状を検証し、課題などを提起したいと考えています。

**◇まちづくりを考える**

グローバル時代にあって、コミュニティや地域、まちづくりに関心をもつ、若い世代の「ローカル志向」が注目されています。私のゼミの卒論テーマにも明確にあらわれています。「町」や「街」でもない、ひらがなの「まちづくり」は次のように定義されています。「地域社会に存在する資源を基礎として、多様な主体が連携・協力して、身近な居住環境を漸進的に改善し、まちの活力と魅力を高め、『生活の質の向上』を実現するための一連の持続的な活動である」

まちづくりのなかでも、名古屋の観光まちづくりに注目してきました。西村幸夫東大教授は、「もともと『まちづくり』と『観光』とは向いているベクトルの向きがまったく異なる。地域社会・地域環境・地域経済との関わりのなかで、まちづくりと観光は接点をもつようになってきた」、観光まちづくりとは「地域が主体となって、自然、文化、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を振興し、活力あるまちを実現するための活動である」と述べています。

**◇アメニティと都市魅力**

アメニティという言葉は日本語に訳しにくいが、快適さ、心地よさなどを表わします。宮本憲一氏によれば「アメニティとは、市場価格では評価できえないものをふくむ生活環境であり、自然、歴史的文化財、街並み、風景、地域文化、コミュニティの連帯、人情、地域的公共サービス（教育、医療、福祉、犯罪防止など）、交通の便利さなどを内容としている」 関一大阪市長のいう「住み心地よき都市」が、日本でアメニティを最初に提唱した都市政策です。大阪の御堂筋や中之島界隈などは、都市景観に優れ、風格のあ

る街並みを形成しています。人間に人格があるように、都市にも「都市格」があると言われています。関一市長時代の大阪から、最近は様変わりしています。では、名古屋のアメニティ、「都市格」はどう評価できるでしょうか。

名古屋は概して住みやすいと言われますが、まちの魅力の評価は芳しくありません。「あまりぱっとしない都市名古屋」といったところでしょうか。各種アンケートの調査結果などから、名古屋の個性と魅力を探っていきます。

**◇名古屋のまちづくり**

名古屋のまちづくりは、「清洲越し」による城下町建設から始まります。今から 405 年前のことです。現代風に言えば、城下町の「高台移転」です。名古屋城と熱田神宮、広小路から本町通り、大須など現代に至る街並みが形成されました。

明治から大正へと時代が進み、工業が発展して人口も増えていきます。昭和に入り「100 万都市」となり、全国有数の軍需工業都市に発展します。戦時下の徹底した空襲により、市域の 4 分の 1 余が焼失します。とりわけ市中心部は焼け野原となり、街並みは一変し、貴重な歴史的遺産もなくなりました。

戦後ただちに焦土からの復興、全国有数の戦災復興事業が行われます。土地区画整理を主体としたまちづくりにより、「青年都市」名古屋の街並みが形成されていきます。伊勢湾台風を経て、高度成長の時代に市街地開発が進みます。その後、経済優先のまちづくりを反省し、「ゆとりとうるおいのあるまちづくり」が展開されていきます。

（2015 年 5 月 23 日）